

# 家族関係における社会的勢力と安定性に関する臨床心理学的研究

著者	野口 修司
号	17
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	教博第186号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00121112">http://hdl.handle.net/10097/00121112</a>

の　ぐち　しゅう　じ  
野　口　修　司

学　位　の　種　類　　博士（教育学）

学　記　番　号　　教博　第　186　号

学位授与年月日　　平成 29 年 3 月 24 日

学位授与の要件　　学位規則第 4 条 1 項該当

研究科・専攻　　東北大学大学院教育学研究科（博士課程後期 3 年の課程）  
総合教育科学専攻

学位論文題目　　家族関係における社会的勢力と安定性に関する臨床心理学的研究

論文審査委員　　（主査）  
准教授　　若　島　孔　文　　　　　教　授　　加　藤　道　代  
准教授　　安　保　英　勇

## ＜論文内容の要旨＞

本論文は、青年期の家族を対象として、①親子関係において子どもが親に対して認識している社会的勢力の関連について検討すること、②どのような家族関係がより機能的であるのかについて、家族構造と家族安定性および社会的勢力との関連から検討すること、を目的としたものである。

第 1 部の「問題と目的」は 4 つの章から構成される。まず、第 1 章では「家族」という集団の歴史的な変遷について家族社会学の視点から概観し、第 2 章では臨床心理学における家族の構造・機能に関する理論を概観するとともに、家族の機能を測定するための 1 要因として「家族システムにおける安定性」に着目した。第 3 章では勢力理論の 1 つとして社会心理学で用いられてきた「社会的勢力」について概観し、社会的勢力における細分化されたカテゴリーについて説明した。そして第 4 章では、家族研究において「社会的勢力」と「家族システムの安定性」を取り扱うことの意義について述べた。具体的には、社会的勢力を用いることで従来の家族研究で捉えられてきた「勢力があるかないか」という一元的な見方ではなく、「どの勢力があってどの勢力がないのか」といった多元的な見方が可能になることや、

家族システムにおける安定性について理論としては取り上げられつつも、それを直接的に測定して検討するような先行研究がなかったことなどが挙げられた。以上を踏まえて本論文では、上記2つの目的に基づいて5つの研究により検討していくこととした。

第2部の「実証研究Ⅰ」は青年期における家族関係と社会的勢力の関連について検討するために3つの章から構成されている。第5章（研究Ⅰ）では、子どもが親に対して認識している社会的勢力と親子間のコミュニケーションの関連について検討した。その結果、子どもが親に対して尊敬をしたり、親の持つ専門的な知識を尊重することなどに基づく「参照 - 専門勢力」を認識することで親子間の肯定的なコミュニケーションに繋がり、親からの影響を受けることで報酬を得たり、不利益を回避できるといった利害的要因に基づく「賞 - 罰勢力」を認識することで親子間の否定的なコミュニケーションに繋がることが示唆された。第6章（研究Ⅱ）では、子どもから見た父、母、子の三者関係における「結びつき」から家族の「結びつき構造」を分類し、子どもが親に対して認識する社会的勢力、家族内ストレス、家族満足度との関連について検討した。その結果、家族三者間の結びつきが全て高い構造が他の構造と比べて、参照 - 専門勢力や家族満足度が高く、賞 - 罰勢力や家族内ストレスが低いという結果が示され、家族全体の関係性が良い構造が最も望ましいことが示唆された。第7章（研究Ⅲ）では、子どもが認識する親の養育態度および家族三者における「結びつき」、「勢力」、「開放性」という3要因から分類した家族構造と、親に対して認識する社会的勢力との関連について検討した。その結果、親の養育態度については、子どもが親の養育態度を「受容的」かつ「自律的」と認識することが子どもの親に対する参照 - 専門勢力の認識に繋がり、「統制的」だと認識することが賞 - 罰勢力の認識に繋がることが示唆された。

第3部の「実証研究Ⅱ」は家族関係における社会的勢力と安定性の関連について検討するために2つの章から構成されている。第8章（研究Ⅳ）では、家族のシステムがどれだけ安定している状態かを測定するために家族安定度測定尺度を作成し、その妥当性を検討するとともに、「結びつき」、「勢力」、「開放性」に基づく家族構造との関連について検討した。その結果、まず家族安定度測定尺度は「問題対応力」、「葛藤的成員の存在」、「非協調的關係」、「混乱性変動」という4因子が抽出され、妥当性も確認された。また、これらの4因子と家族構造との関連を検討した結果、「家族全体が親密で、勢力関係が均衡しており、開放性が高い」構造が他の構造と比べて、家族安定度各因子が最も肯定的であるという結果が示された。第9章（研究Ⅴ）では、青年期後期に該当する子どもを対象として、現在（青年期後期）および中高生期による過去（青年期前期）それぞれの家族構造および家族安定度、親に対して認識する社会的勢力を測定して関連を検討した。その結果、家族安定度については青年期の前期後期それぞれにおいて、「家族全体が親密で、勢力関係が均衡しており、開放性が高い」構造が他の構造と比べて家族安定度各因子が最も肯定的であるという結果が示された。親に対して認識する社会的勢力については、青年期後期では家族安定度と同様に「家族全体の親密で、勢力関係が均衡しており、開放性が高い」構造が最も肯定的である結果が示された一方で、青年期前期については上記の構造だけではなく「家族全体が親密で、親の勢力が子どもよりも高い」構造についても肯定的な関連を示すなど、青年期の前後によって関連が異なることが示唆された。

第4部の「討論」は2つの章から構成されている。第10章（総合考察）および第11章（今後の課題と展開）では、本論文における5つの研究結果に基づき、①青年期の家族関係における社会的勢力の関連について、「参照 - 専門勢力」は、親子間におけるお互いへの親和的な関わりや感情により強く関連している「親和的勢力」とも言うべきものであり、「賞 - 罰勢力」は、親が子どもを強くコントロールしようとする意図とその行動に基づく「統制的勢力」とも言うべき特徴を持っていること、②青年期の家族における最も機能的な家族関係について、父、母、子という家族三者の「結びつき」、「勢力」、「開放性」に基づいた場合、子どもから見て「家族全体が親密であり、勢力関係が均衡しており、開放性が高い」関係が家族の安定性において最も機能的であるということが考察された。

本論文では、家族研究に「社会的勢力」を取り入れることにより、従来の家族研究よりもさらに細分化された検討が可能となった。また、「家族システムにおける安定性」に着目し、それに基づいた最も機能的な家族構造が示唆されたことは、臨床場面における1つの指標としても有効であると言えるだろう。

## ＜論文審査の結果の要旨＞

青年期の家族を対象として、①親子関係において子どもが親に対して認識している社会的勢力の関連について検討すること、②どのような家族関係がより機能的であるのかについて、家族構造と家族安定性および社会的勢力との関連から検討することであった。そのような中で、評価できる点を以下に述べる。

第一に、家族関係における「勢力」という要因に、社会心理学の概念であった「社会的勢力」を適用させることで、これまでの家族研究で捉えられてきた「勢力があるかないか」という一元的な視点から、「どの勢力がどの程度あるのか」といった多様な視点での検討を可能にした。具体的には、「参照 - 専門勢力」と「賞 - 罰勢力」という2つの勢力に着目することで、勢力を持つことの肯定的な関連と否定的な関連のそれぞれを明らかにした。

第二に、家族システム理論の視点から、家族システムを適切に維持していくための変数として「安定性」という概念を用いて、家族機能の要因として検討している。これにより、家族成員のストレスや満足度といった個人的要因だけではなく、家族システム全体としての要因に関する変数が追加された。

第三に、家族三者間における「結びつき」、「勢力」、「開放性」という3要因に基づいて、最も機能的である家族構造として「家族全体の結びつきが強く、勢力関係が均衡しており、開放的である」家族という1つの指標を提示した。特に、「開放性」という要因を加えて検討することで、家族関係でありながらも家族以外の他者との関わりが重要であることを示した。

なお、不十分な点もある。一つは、親子間の社会的勢力という大きな関連は明らかにした一方で、父母それぞれにおける勢力の違いや、子どもの性別による親との勢力関係の違いといった詳細な点について、検討の余地が未だ残っている。二点目として、父、母、子という

三者間における家族構造を検討した一方で、一人親家庭やステップ・ファミリーといった近年増えつつある新たな家族形態に対して説明できるものではなく、今後新たに検討していく必要があると言える。

しかしながら、そのような中でも、ここで明らかにされた家族構造は父、母、子という三者関係モデルとしては、一般化可能なモデルを提示していることから、家族構造研究に大きな貢献を果たしたと考える。よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として合格と認める。